第３回　小豆島町総合教育会議

【日時・場所】

○開催日時　平成 27 年 9 月 25 日（金）　午後 1 時半～午後 3 時
○開催場所　研修室
○出 席 者　塩田町長、後藤教育長、香川県教育委員会高校教育課長　出射課長
香川県教育委員会特別支援教育課　松木課長
熊坂委員、岡田委員、黒木委員、岡本委員
○同席者　【町職員】
松本副町長、松尾副町長、空林総務部長、坂東教育部長、濵田健康福祉部長
後藤子育ち共育課長、楠健康づくり福祉課長、高橋教育指導室長
【教育関係者】
岩澤小豆島高等学校校長、泉谷土庄高等学校教頭、笠井小豆島中学校教頭、
片山池田小学校校長、羽座星城小学校校長、三浦安田小学校校長、
松岡苗羽小学校教頭、安藤園長（星城・安田・苗羽幼稚園）、
川口園長（旭・福田幼稚園、内海保育所橘・福田分園）、中多小豆島こども
センター園長、増田小豆島こどもセンター所長、大岡内海保育所所長、慈氏
草壁保育園園長
○傍聴者　10 名
○事務局　4 名

【内　　容】

［塩田町長］　挨拶
今回の総合教育会議では、香川県教育委員会高校教育課長の出射課長と特別支援教育課長の松木課長からお話を伺う。高校教育課長には、特に新しく開校する高校の準備状況を、特別支援教育課長には、小豆島に養護学校の分室を設置できないか要望しているところであり、香川県の特別支援教育の現状をお話しいただきたい。
そして、10 月 20 日は第 4 回総合教育会議を開催する予定ですが、次回は同じく香川県教育委員会の義務教育課長に来ていただき、香川県の義務教育の現状についてお話しいただく予定にしている。

［出射高校教育課長］　挨拶
平成 20 年度高校教育課の高校再編担当の課長補佐をしており、当時小豆島の高校二校をどうしていくか、意見を聴く会を５回程設け、島の教育を将来どうしていくのか意見交換を行っていた。それから７、８年経つが、やっと平成２９年に開校というスタートに立

てたと思う。二つの高校を統合するが、新しい場所、校舎で新しい高校を創っていくためには、やはり両町の協力が必要である。高校だけの問題ではなく、保育園、幼稚園、小学校、中学校、高校と全体のことを考えていかなければいけないと思う。今までの統合高校は、募集停止をしていたが、今回は初めて転校方式をとり、開校時に三学年揃った勢いのある状態でスタートする。学校規模は、両町の人口から考えると一学年五学級から六学級を想定しており、高校の標準学級が 40 人程度なので、一学年 200 人前後を想定している。現在は、両校とも 100 人前後であって、通常三学級であるが、事実上四学級の規模で行っている。また、定時制課程であるが、両校とも一学年一学級規模でありこれも残り、今までは全日制課程の教室を利用していたが、新高校は全日制課程とは別に教室を設ける。全日制課程では、普通科を設け、特進コース、普通コース（文系・理系）、普通コース（総合）に分かれる。定時制課程では、三修制を導入していく。現在三修制は、県内で三木高校と丸亀高校でのみ取り入れている。

教育方針としては、学業や部活に打ち込める魅力ある教育環境の中で、生徒一人ひとりの資質・能力を伸ばすとともに、豊かな人間性と創造性を培い、自主自律の精神を養う教育を行うことにより、高い理想の現実に挑み続ける人間を育成することとしている。教育の特色としては、小豆地域唯一の高校として、地域から愛され期待される学校をめざしていき、少人数指導などきめ細やかな指導を行い、学習の実現を図る。特進コースでは、国公立大学や難関私立大学への進学を目指す学習を行えるようにしたい。現在両校ともこういった特進クラスがあるが、1 年生からではなく普通科に入って特進クラスへ進む形態をとっていたが、今回は新しく入試時点から特進コースの定員を決め入試を行う。やはり、入試の時点から、努力して特進コースへ入るということで意識を高めてほしい。そして、普通コースでは多様な進路に対応していきたい。特進コースと普通コースを分けて募集するが、併願を可能とする。部活動の振興も図っていきたい。特にチーム競技である部活に関しては、開校時にスムーズに行えるように予算をとり、交流しながら部活ができるように進める予定である。また、島外からの進学、島内であっても登校に支障をきたす場合に対応できるよう生徒寮を設け、約 36 名程度の生徒を見込んでおり、大部屋ではなく完全個室になっている。

島の子供たちが全員入学するということを想定しているので、多様な進路・能力・資質・ニーズに対応できるようコース設定をしている。定時制では三修制を取り入れると話したが、二学期制を取り入れ秋季募集を行う予定にしている。これも、県内では三木高校と丸亀高校でのみ取り入れられている。途中からでも学ぶことができる機会を提供し、最短で三年で卒業できる。全日制では、入試の時点で普通コースに進んでいても努力すれば特進コースへ進めるようになっている。

部活動については、現在両校にある部活動を継続して行えるような設備、体制を設ける予定である。今までは、チーム競技のため人数が少なく成立しなかった部活動も生徒数が増えることにより成立していけると思う。

入試については、香川県は第一学区・第二学区とあるが、平成 29 年 4 月からの新高校では県内全域からの出願を可能とする予定にしている。これも小豆地域の特徴である。

施設については、現在の両校よりもグラウンドや体育館も大きな施設・敷地を設けられ

ている。このような一つの敷地内で教育するということが、今回の大きなコンセプトであったので非常に感謝している。建設工事、整備ともに開校に向けて、順次行っていく予定である。

[塩田町長]
　では、教育委員から質問を。

[後藤教育長]
　今からの準備が大変であるが、校名などの問題についてはどう考えているのか。

[出射高校教育課長]
　従来であれば、開校の前年度の6月に公表し9月議会で通るというのが一般的であったが、校名の後に校歌・校章の公募のスケジュールもあるので、できれば今年度中には決定していきたい思いで、スケジュールを進めていければと思っている。これについては、中学生や在校生に対して、校名ではないがどういった言葉を入れてほしいか等アンケートをとっており、両校の同窓会、PTAに意見をきいているところである。最終的には議会で決まるが、教育委員会で責任をもって決めていきたいと思っている。

[熊坂委員]
　教育課程について、小豆島の子供たちはほとんどが小豆島の高校へ行くが、高松や丸亀等の子どもたちはいろいろな学校が選べ、選択肢が多様にある。その点で、新しい高校も多様な選択肢のある幅広い高校にしてほしい。普通科しかないが、他の芸術系の分野等も補っていけるようにしてほしい。現在の小豆島高校は芸術の授業がないので、できればそういった分野の授業を行えるような体制を設けてもらえたらと思う。

[出射高校教育課長]
　現在土庄高校には芸術の授業はあるので、新高校でも授業を設けるつもりである。合同準備委員会で話し合っているところであるが、普通科の中で多様な選択肢を持てるような体制をとっていきたいと思っている。要望の中には、普通科以外に商業、看護、福祉等についての学科の配置があったが、全ての学科を設置することは設備や人材面的に難しい。ニーズに沿っていけるような取り組みはしていきたいと思っている。

[岡田委員]
　できれば、新高校が出来るので初めから看護や福祉系の科を作ってもらえたら、島外から入学を希望する子どもも増えるのではないか。また、三修制について初めて聞いたが、三年で卒業するとなると時間はどういった配分になるのかうかがいたい。

[出射高校教育課長]
　看護や福祉系の科を設置することは、先ほど申し上げた通り難しいが、やはり生徒のた

めに視野を広げていけるように、普通科であっても家庭科の中で福祉の科目を取り入れるなど、意識を造成していき、将来的に専門学校へ進学したりすることもできる。そういった意識をもっていくことは大切だと思っている。
　定時制の時間に関しては、従来午後 4 時から 4 時間程度、週 20 時間程度ですが、三修制については、午後 3 時から夜間前授業というものがあり、1 日 6 時間、週 30 時間程度で授業を進めていく。以前は働いた後に授業を受ける生徒が多かったが、現在は多様な生徒がおり、三修制を選択する者が多い。

［黒木委員］
　新高校になってもおそらく先生方は船で通ってくる方が多いかと思うが、島に住んで腰を落ち着けじっくりと教育してもらいたい。先生方の住む寮、住宅は配備するのか。

［出射高校教育課長］
　原則は島で住んでもらうことを想定している。現在県で所有している教職員住宅がいくつかあるが、これも老朽化しておりその住宅に関しても検討している所である。やはり、生徒の糧は教員だと思うので、島で住んでもらうためにも、働きやすい環境づくりにも力を入れていかなければならないと考えている。

［黒木委員］
　もう一点であるが、新高校の配置図を見ると駐車場が狭いと感じる。行事等の際、保護者が大勢来ることが想定されるが、これで足りるのか。

［出射高校教育課長］
　この配置図で、生徒寮の方にも設ける予定であるため駐車場は足りると考えている。南門から入れるようにし、グラウンドにも停められるようにすることを想定している。

［岡本委員］
　特進コースで国公立大学、難関私立大学を目指し、部活動の活躍も期待されるところであるが、やはり指導者、教員の質が問われるかと思う。その配慮はあるのか。

［出射高校教育課長］
　一番問われるところであるが、例えば現在の小豆島高校の駅伝や野球の活躍があるが、全部の部活動を強くすることは難しい。どんな教員が来るかとははっきり言えないが、それも含めて、地元のニーズに応えていきたいところである。勉強も部活動も、小学校から高校まで一貫して考えていければと思っている。

［後藤教育長］
　現在小豆島町においても、幼保小中と一貫して、体力づくり、学力向上を目指して取り組んでいるところである。

[塩田町長]
　小豆島の先生方から質問、意見があればお願いしたい。

[岩澤小豆島高校校長]
　現時点でも土庄高校と小豆島校長の交流を深めているところであるが、来年度も新高校開校に向けて交流をしていきたいと思っている。また、統合した後の教員の確保についても是非お願いしたい。

[泉谷土庄高等学校教頭]
　私も平成 20 年度から統合校設立に向けて携わった。以前は小豆島高校に勤務しており、両校とも現在、普通科思考が非常に強い。要するに、卒業してすぐ就職するよりも、もう一つ上の学校へ行ってから就職を希望することが多いのが現状である。進路希望調査をとっても、進学、普通科希望が多い。そういったニーズに合わせて今回普通科を基本としたコースを設けてもらった経緯がある。しかし、専門的なものも必要だとも思うので、高校教育課長が言っていたように、授業の中で選択して学べるようにしていきたいと考えている。また、進路指導の際に希望を聞き、個別に対応できる手厚い指導をしていけると思う。

[塩田町長]
　野球部が、もしセンバツで選ばれて全国大会に行く際に高校が切り替わった場合はどうなるのか。

[出射高校教育課長]
　合同チームは、上へ繋がる試合にはどうしても出場できない。私学では途中で校名を変更した学校はあるが、統合した高校は調べたところ今まで存在しない。

[塩田町長]
　いい高校にしたいので協力をお願いしたい。
　では、次に特別支援教育課長よりお話をお願いしたい。

[松木特別支援教育課長]　挨拶
　まずは、国の動向について話をしていきたい。平成 19 年度に特殊教育から特別支援教育へ名称が変更になった。当然内容も変わり、特殊教育のときは、障がいの種類や程度に応じてその欠陥を補うもので、養護学校、特殊学級という特別な場で指導を行い、手厚く教育していくという教育内容であった。そこから、特別支援教育になり障がいをもつ子どもたちの自立、社会参加するために、持っている力を最大限に出せるように適切な指導、支援を行っていく教育内容に変わっている。特別支援学校や特別支援学級に在籍する子どものみならず、幼小中高と通常の学級に在籍する発達障害の子どもも含め教育支援を必要とする子供たちの在籍するすべての学校において実施されるものに変わってきている。また、平成 24 年 7 月に地方教育審議会で、共生社会の形成に向けたインクルーシング教育

システム構築のための特別支援教育の推進という報告がなされた。この報告がなされてから、特別支援教育が加速化をしている状況である。方向性としては、障がいがあるなしに関わらず、できるだけ同じ場で共に学ぶことを基本としている。両者が理解をし、学ぶことを実感し、達成感を感じ、力を身につけていくことを目指していくことが本質的な視点である。このように、多様な教育的ニーズに柔軟な対応することのできる仕組みを構築することが最も重要なことである。特別支援学校、特別支援学級、通級による指導等の学びの場の提供など、香川県においてもこういった取り組みを行っているところである。また、平成 26 年度において義務教育段階で約一千万人の子どもがいる中で、特別支援学校に在籍している子どもが 6 万 9 千人、全体の約 0.7%、特別支援学級に在籍している子どもが 18 万 7 千人で約 1.8%、通級による指導を受けている生徒が約 8 万 4 千人で約 0.8%、合わせて約 3.3%の子どもたちがいる。また、通常の学級に LD（学習障害）、ADHD（注意欠如多動性障害）、高機能自閉症等の発達障害の可能性のある児童、生徒が平成 24 年度の国の数字で約 6.5%在籍している。香川県においてもこういった子どもたちが増えている傾向にある。

次に香川県での取り組みであるが、特別支援学校の現状は生徒の数が増えており、校舎施設等増築している。小中学校からの要望や多様な障がいに対応するセンター的機能をもつ必要性もある。また、交流及び共同学習の推進により、心のバリアフリーと言うか、地域の人との繋がり、居住地の小中学校との交流も行っているところである。特別支援教育においても幼小中高、関係機関との連携が重要である。また、就学基準については障がいの種類により、原則特別支援学校へ就学をしていたが、平成 25 年に見直しがあり、各々教育委員会をはじめ様々な機関で判断して就学を決定するよう制度を改めている。これから質の向上が重要であると考えている。教員についても、基礎的・専門的な知識を身につけることや、質の向上が求められるところであるので、研修などを通してこれを身につけていくことが課題であり取り組んでいるところである。

最後に小豆地域の特別支援教育の現状と課題について。平成 20 年 4 月に肢体不自由対象の高松養護学校小豆分室を設置しており、現在 2 名の教員がおり訪問教育を行っている。これについても、センター的機能を果たすため幼保小中学校との連携を取り、教育相談にも対応しているところである。小豆地域でも障がいのある子どもが増えている傾向にあり、相談に対応する小豆分室の 2 人では教員が足りないという現状も把握している。

また、特別支援学校での教育を希望する生徒が親元を離れ、島外へ通学することで、子ども保護者共々、精神的・経済的に負担が大きいことと思う。こういった小豆地域の特別支援教育についてどういった取り組みをするかということは、教育委員会の中でも課題となっており、関係者の意見、ニーズを聞きながら検討しているところである。今年 6 月に両町の教育委員会に出向き、現状を確認するとともに意見を聞き特別支援のあり方を協議してきたところである。保護者、教育委員会ともに特別支援学校設立を強く要望している現状も把握しており、町、保護者の意見を十分に聞きながら、県教育委員会ともに検討しているところであり、これからも、小豆地域の特別支援教育の推進に力を入れていきたい。

［塩田町長］

では、教育委員から質問を。

［後藤教育長］
通級による指導員が現在池田小学校に配置されているが、教育委員会に配置できないか。その方が他の学校を曜日別にするなど、指導しやすくなるのではないか。また、国で決まっていることであるが、特別支援学級が８人以上いなければ設置できないことになっているが、小豆島の学校では人数も少なく不可能である点についてどうにかならないか。

［松木特別支援教育課長］
通級による指導員に関しては、現在検討委員会が設けられて検討しているところであり、指導員が教育委員会に在籍することで指導しやすくなるという考えもある。しかし、急に教育委員会に異動させることは難しい。

［塩田町長］
池田小学校に配置されていてどういう働きをしているのか。

［後藤教育長］
池田小学校に配置され、他の小学校に順次出向き指導してもらっている。

［塩田町長］
事実上他の学校にも回っているので支障があるわけではないのではないか。それを教育委員会に配置されることで何か変わるのか。

［後藤教育長］
現状では人数的に対応できるのが精一杯である。通級指導のみ行っており、特別支援に特化した取り組みが行われていない。

［塩田町長］
それは小豆島町だけの問題か、県内での問題か。

［松木特別支援教育課長］
県内での問題である。教育長が言っていたように、教育委員会に配置されることによって指導しやすくなり、効率が良くなるという考えもある。
また、特別支援学級についてであるが、子どもの数が１学級１人から８人と法律で決まっているが、子どもの障がいの状況により対応できるようにしていきたい。

［熊坂委員］
学校訪問をしていると障がいをもつ子どもが多い傾向にあると感じられる。この子どもたちが、できるだけ丁寧な教育を受けられるような制度が十分に整備されているのか心配

に感じている。教育現場にいない社会のひとからは、弱者に対する目が冷たいのではと感じるところもある。障がいをもつ子どもだけではなくいわゆる社会での弱者に対する応援、温かい目をもつことが、専門的な理解とともに重要ではないのかと思う。

[松木特別支援教育課長]
　障がいをもつ子どもたちに関しては、一人ひとりのニーズを把握して対応していくことが本当に大切であると感じており、周りで関わる者に関しても特別支援教育に関する理解が大切であると思う。教職員ももちろんであるが、一般の方々にも理解を図るような講座の開催等行っている。軽度の発達障害であれば、周りの理解のもと通常の生活をしていくことができる。

[岡田委員]
　ハード面であるが、小豆島でもやはりこういった子どもたちが増えている中で、将来的にこの子たちが通うことのできる学校が小豆島にできれば親子共々、肉体的・経済的に本当に助かると思う。

[松木特別支援教育課長]
　保護者、関係者等との意見交換を行いながら現段階でも検討されているところであり、引き続き検討していく予定である。

[塩田町長]
　是非、積極的に検討をお願いしたい。

[黒木委員]
　島であるがゆえに、特別支援教育が十分に受けられないことがないように問題を解消してもらいたい。そして、なるべく早く特別支援学校を設立してほしい。

[岡本委員]
　皆が言っているように、検討を急いでいただき、早く実行に移してほしい。

[ひまわり福祉会管理者]
　特別支援学校の話が出ているが、私は小豆島特別支援学校設立部会の事務局を務めている。両課長に特別支援学校について話を伺いたい。平成 20 年から新高校設立に向けて務めていらっしゃる出射課長は、それから何年か会を開いていただき、その度に特別支援学校設立の話は毎回出ていた。その当時の課長は、前向きに検討していくと言っていた。新高校は出来つつあるが、特別支援学校は全く姿が見えない。あの時の答弁はどうなったのか。また、先月要望書を提出し検討するとの回答をもらったが一カ月経ったが何か進展はあったか。

［出射高校教育課長］
　24 年、25 年と校長として務めた際、小豆分室のあり方について本当に悩んでいた。職員を派遣し町と連携をとり、システムの開発等に力をいれたが、本質的な小豆分室の問題解決にはならなかったことが、本当に心残りでならなかった。多様なニーズのある中で、早く開校をという声が上がっていることも十分把握している。しっかりと検討した中で進めていければと思う。

［松木特別支援教育課長］
　多様な学びの場にしていくことが必要であるといった話のなかでも、特別支援学校が小豆島にはないというところが一番の心配、課題であるということが現状である。県としても、多様な学びの場を整備することが大切であると感じている。特別支援学校を設立する際も、本校にするのか分校にするのか、あるいは今ある小豆分室を拡充し、専門的な教員を増員するといった選択肢もあろうかと思う

［塩田町長］
　先般小豆島町議会からも特別支援学校について要望を提出しているので、よろしくお願いしたい。両課長ともありがとうございました。
　次回は、10 月 20 日に開催する予定である。